

みなさん、詩はお好きですか？

日本では、古くは『万葉集』をはじめとした和歌や、松尾芭蕉などで有名な俳句、中国より入ってきた漢詩、明治以降には自由詩が生まれ、多くの詩の形が存在します。

ヨーロッパでも、古代ギリシャの叙事詩にはじまり、中世以降ソネットなどのさまざまな詩の形式が発達し、西洋においては、詩人が、それぞれの国の文学者の中で、最も尊敬される存在となっています。

通常の文章は、論理を伝えるのに向いているのに対し、詩は、イメージを深く鮮やかに焼きつけるのに向いています。一度覚えた和歌や詩の一節を簡単に忘れないのは、このためです。

実は、詩は、仏教とも縁が深いものなのです。

お釈迦さまの言葉や生き方が記された原始仏教のお経では、その多くが詩の形で表現されています。

なぜ、詩を用いるのでしょうか。

それは、お経の成立の仕方と関係があると考えられます。

お釈迦さまは、ご自分の教えを文字に記して残しませんでした。そのため、お釈迦さまが亡くなられ、お釈迦さまの教えを整理してまとめることが必要になりました。弟子たちは、それぞれが記憶している教えを、文字によらず、話し言葉で語り合い、それをまとめました。お釈迦さまと同じく、弟子たちも、文字によらず、話し言葉で次の世代に伝えていきました。そんな中で、記憶をしっかりと定着させるために、詩で表現したのだと思われます。

代表的な大乘仏教のお経のひとつ『法華経』も、長い文章の後に、その内容を詩の形でまとめていますし、それから時代を経た中国の禅の僧侶たちも、自らの境地を、詩の形で多く表しています。

道元禪師も、和歌を多く詠んでおられます。また、江戸時代の曹洞宗の僧侶、良寛も、漢詩、俳句、和歌と、さまざまな形式で自らの境地を表現しています。

このように、詩は仏教と深く関わりがあるのです。

結びに、ふたつの和歌をご紹介します。

濁りなき 心の水に すむ月は 波もくだけて 光とぞなる 道元禪師
夢の世に かつまどろみて 夢をまた 語るも夢も それがまにまに 良寛

— 終 —